

ジョージ・エリオットのリアリズムの進展における 『急進主義者フィーリクス・ホルト』の位置づけ

石井昌子

I 本発表の目的と方法

George Eliot (1819–80) の小説のリアリズムが作者の道徳観の寛容化 (シンパシーの対象の拡大) に伴い、最初の長編小説 *Adam Bede* (1859)、2 番目の *The Mill on the Floss* (1860)、後期作品 *Middlemarch* (1871–72) の順で、登場人物の性格・心理の描写、出来事の蓋然性において進展してゆくことは既に別の機会に発表した^註。本発表では、エリオットの小説のリアリズムの進展における中期長編小説 *Felix Holt: The Radical* (1866) の位置づけを探る。その方法としてはここでもシンパシーに乏しい人間に注目する。作者の道徳観の影響はシンパシーに乏しい人間の描き方に現れやすいと思われるためである。

II 初期作品から後期作品にかけてのリアリズムの進展

『アダム・ビード』では、主人公の 1 人 Hetty に注目すると、シンパシーの多寡により人間を固定的に分類し、ヘティの自分を誘惑した人間への憤りは軽視し、ヘティに新たに芽生えた動物や家族、自分の赤ん坊へのシンパシーは描かないか、描いても評価しないで彼女を追放してしまう。『フロス河畔の水車場』では、主人公 Maggie の兄 Tom に注目すると、シンパシーに乏しい人間トムのシンパセティックな側面も十分に描かれており、また自分の信頼を裏切り自分に恥をかかせたマギーへの憤りの発言を詳しく描写するなどリアリズムが進展している。しかし孤独や疎外感、ルーシーへの恋心や妹に裏切られた悲しみなどのトムの弱い心境は描かれない。さらにマギーに対するトムの誤解と勘当を解くために、洪水に伴う蓋然性のきわめて低いと思われるプロットを用いている点でリアリズムを逸脱している。『ミドルマーチ』では、莊園領主で神話の研究をライフワークとしているシンパシーに乏しい牧師 Edward Casaubon とシンパセティックな Dorothea の夫婦、医者で偉大な医学上の発見を目指すシンパセティックな Tertius Lydgate とシンパシーに乏しい Rosamond の 2 組の夫婦の関係に注目する。すると『ミドルマーチ』においては、シンパシーに乏しい人間の嘆きも語り手が同情を持って描き、シンパセティックな人間が他者を必ずしも幸せにできず、シンパシーに乏しい人間が期せずして他者をより大きな絶望から救うなど出来事の蓋然性も高まり、リアリズムが進展している。

III 中期小説におけるリアリズムの後退と進展

エリオットの中期長編小説には、*Romola* (1862-63) と *Felix Holt: The Radical* (1866) の 2 つがあるが、15 世紀のイタリア、フィレンツェを舞台とした『ロモラ』は、主人公ロモラの夫 Tito Melema に注目するとその利己的な性格描写は明らかに一面的・固定的で、リアリズムが『フロス河畔の水車場』より後退している。本発表では『急進主義者フィーリクス・ホルト』を取り上げ、Mrs. Transome に注目する。

①シンパシーに乏しい トランサム夫人 の描写のリアリズムに関する先行研究

* トランサム夫人の孤独と疎外感の心理描写は「偉大な作家の心理学的洞察と優れた人間評価」の産物である (Leavis 71)。

* トランサム夫人は「不自然で…無用な人物」である (James 276)。

②本発表の立場

(i) トランサム夫人の性格描写はヘティのそれと同じく一面的である (虚栄心が強くシンパシーに欠ける) 点は『フロス河畔の水車場』のトムの性格の包括的描写よりリアリズムが後退している。

(ii) トランサム夫人の身勝手ではあるが孤独と疎外感に苦悩する心が詳しく描かれている点でトムの描写よりリアリズムが進展しており、『ミドルマーチ』の先駆けと言える。

まず(i)を比較する。ヘティは世話になっているおじの農園 Hall Farm の人間を愛することができない。トランサム夫人は顧問弁護士 Jermyn との不倫により Harold を生んで後、ジャーミンが莊園の利益を横領することを黙って耐えてきた。夫人はハロルドの出生の秘密につき、「神の怒りあるいは慈悲ではなく、息子の怒りや慈悲を考え」ながら (ch. 34)、沈黙を強いられてきた。しかし夫人自身、言葉で意思表示のできない人間に対してシンパシーを持たない人間として描かれている。トランサム夫人はハロルドの幼い息子 Harry と精神薄弱で脚の不自由な夫を邪険に扱う。トランサム氏の服装や身体には世話が行き届いているが、夫人の夫に対する眼差しは冷たい (ch. 1)。夫人の非難の目を見ただけで、トランサム氏はそれまで意図していた昆虫の標本の再整理を諦めてしまう (ch. 1)。ハロルドは夫人がハリーを可愛がらないことを嘆いており (ch. 34)、ハリーは夫人を「がみがみ」と呼んでいる (ch. 40)。夫人は自分の「癩癩と専横」のせいで夫が自分を愛さないのを自覚しつつ、召使の Denner 以外に自分を愛してくれる人間がないことを嘆く身勝手な人間である (ch. 35)。次にヘティは、生まれたばかりの自分の赤ん坊を、家に帰る邪魔になるからと森に捨てて死なせてしまう。トランサム夫人は、くる病で愚鈍で醜い長男を嫌い、彼が死んで次男のハロルドが領地を相続することを強く願い、ハロルドが 33 歳の時に長男が亡くなるまでずっと願い続ける (ch. 1)。トランサム夫人は、自分で手を下した訳ではないが、邪魔になった自分の子供

に対するシンパシーのなさにおいてはヘティと同じである。またヘティが自室で自分を飾り立てて自己陶醉し、貴婦人になったつもりでふんぞり返って歩く愚かな虚栄心に満ちた場面が詳細に描かれているが、トランサム夫人も、ハロルドが中東で財産を築いて戻って来るまで、自分に残されたささやかな権力をすべて行使することを好んだ様子が具体的かつ詳細に描かれている。他方トムは、子供の頃、寄宿して勉強を教わっていた牧師の幼い娘の散歩を習慣として言いつけられ、それがその重い娘を抱いて庭をぐるぐる回ることであっても嫌がらないだけの優しさを持っていた。語り手は弱いものに対するトムのこの優しさを、「真の男らしさ」(“true manliness”)と呼んで賞賛している (bk. 2, ch. 1)。またトムは、子供の頃からマギーが自分の気に入らないことをすると「愛してやらない」と言って冷たい態度を取ってマギーを泣かせるが、基本的にはマギーを愛しており親切にする意志がある (bk. 1, ch. 5)。トムが両親にシンパセティックな態度を示す場面もある (bk. 3, chs. 3, 9)。

次に(ii)を比較する。ヘティの自分を誘惑したアーサーに対する憤りの内容はたった2行の自由間接話法で済まされている。しかも「憤って何になるのかも分からずに」という語り手の見下した解説まで付いている。またヘティは出産間近になってアーサーに会いに出たまま放浪し、そこで初めてホームシックを感じるが、これも自由間接話法4行だけで済まされている。そして「絶望の旅」と題されたこの章の最後では、「このような悲惨の始まりを経験しないで済むように、神があなたと私をお守りくださいますように (ch. 37) と言って、ヘティをあくまで憐れむべき異分子として提示している。他方トムは、ステイブンのと駆け落ちを断念して1人で帰ってきたマギーに、「うちにはお前の居場所はないよ」という言葉で始まる全部で31行に及ぶ非難の言葉を投げつけて勘当する。その中でトムは世間と自分を同一視している。ここには父親の破産後、名誉回復に専心する結果、マギーへのシンパシーを失ったトムの性格の変化も表れている。しかし反面、トムが感じたであろう孤独や疎外感とは描かれていない。トムは父親の破産に伴い伯父の会社で働くことになるが、最初は倉庫で働く。ジェントルマン教育を受けたトムは労働者に混じって働きながら孤独や疎外感を感じたに違いない。しかしそのことはトムの心境としては全く描かれない。またトムのルーシーへの恋心も、周囲の人間が想像する形で浮上するだけである。これに対してトランサム夫人の孤独や自分の運命に対する嘆きは、息子のハロルドと弁護士ジャーミンに対する不満や憤りとともに詳細に描かれる。例えばハロルドが自分の出生の秘密を知って自室に閉じこもった時のトランサム夫人のハロルドへの不満も、自由間接話法で長々と描かれている。エリオットの初期と中期の長編小説において、シンパシーに乏しい人間が自分の境遇を嘆き苦悩する様子が詳しく描かれているのはトランサム夫人のみである。トランサム夫人は全部で51章ある物語の中の16章にのみ登場するが、第38章以外は、自分の運命を嘆くか少なくとも不機嫌であり、「気の毒なトランサム夫人」という語が、過去は変えられないという文脈で2度使われている。エリオットは『フィーリクス・ホルト』において初めてシンパシーに乏しい人間を「我々の仲間」として扱い、その悲しみを克明に描いているのである。

IV まとめ

エリオットの小説のリアリズムをシンパシーに乏しい人物を通して通時的に見る時、トランサム夫人はヘティ同様、そのシンパシーに欠ける性格のみが強調されている点では、トムがそのシンパセティックな側面も十分に描かれ、また家の没落による性格の変化まで描かれているのに比べ、リアリズムにおいて後退している。しかしながら、トランサム夫人の憤りは孤独や疎外感など人間的弱さの訴えとともに、ヘンリー・ジェイムズに「不自然な人物」と評されるほど「強烈に」描かれている。この点では『フィーリクス・ホルト』のリアリズムは進展し、シンパシーに乏しい人物の苦悩を語り手が同情を持って描く『ミドルマーチ』を彷彿させる。

註

Cf. 拙稿 “Development of Realism in *Middlemarch*: Reinterpreting Rosamond,” *The George Eliot Review Online*, no. 55, 2024 (forthcoming).

「『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムと道徳観の相克——トムとマギーの兄妹愛の描き方からの再考」『日本英文学会第95回大会 Proceedings, 2023』.

「語り手の心の鏡に映らないもの——『アダム・ビード』再考」『ジョージ・エリオット研究』第24号, 2022, pp. 65–81.

引用文献

James, Henry. “Review of Felix Holt.” *Critical Heritage*, edited by David Carroll, Routledge, 1971, pp. 273–77.

Leavis, F. R. *The Great Tradition*. Faber & Faber, 2008; first published in 1948.

